まなびの環を拡げるために

岩槻　邦男
（ひとはく館長）

共生のひろばは今年で２年目です。

第１回目の共生のひろばは大成功のうちに幕を降ろしました。その印象が鮮烈だったために、それがまだつい先だってのことのように思われていました。最初が大成功だと、２回目はどうなるかと心配になるものです。日まで同じにと設定された２回目の共生のひろばに臨む気持ちの底には、期待と不安が交錯しておりました。

2007年２月11日、第２回目の共生のひろばは、最初から最後まで、すごい熱気に包まれました。詰まった日程のうちで、準備された観察や共同研究の結果の報告が展開しました。そして、この日、１回目を上回る成果が得られたとの手応えを得るまでに、そんなに時間がかかりませんでした。

すべての報告が終わり、館長賞、名誉館長賞の選考を終えたあとで、軽い疲労をおぼえました。しかし、それは大変快い疲労感でした。共生のひろばは、２回目の成功で、今後の発展が約束されたように思います。これから、毎年２月11日は、ひとはくを軸に展開する共同の調査・研究の成果が紹介されるすばらしい日であり続けてくれることでしょう。

主催者側のひとはくの論理でいいますと、共生のひろばはひとはくが新展開で実を稔らせ始めているひとはく地域研究員の温床です。ひとはくには定員56人の常勤職員が割り当てられていますが、兵庫県民560万人の自然・環境にかかわる生涯学習支援のためには、56人ができることは限られます。ひとはくが自然・環境にかかわる生涯学習を展開し、支援の輪を560万県民に拡げるためには、まず館員と密接に協働し、核からの波紋の最初の環を育てる人たちをもつことが不可欠です。そのような地域研究員を育てることは、現在の博物館にとっては欠くことのできないつとめです。

ひとはくは、館員といっしょに自然・環境を観察し、解析することに歓びを見出しているたくさんのすぐれた仲間たちをもっています。その仲間たちとの協働の成果を、館員と仲間たちがいっしょに点検しようとして企画したのが共生のひろばです。この企画の成功を２回にわたって確認したということは、ひとはくの館員と親しい仲間たちとの協働が見事な展開を見せていることを確認することだったのです。わたしたちは、兵庫県民560万人の自然・環境にかかわる生涯学習を支える体制整備の第一歩に成功したことを自信をもって見詰めているところです。

明治以後の日本の教育体制は、学校教育における知育を軸に展開しました。鎖国の扉を開いて、西欧のすぐれた文明に驚嘆した先輩たちが、西欧に追いつけ、追い越せと努力をし、100年の計を稔らせてその目標を見事に達成したことに賞賛の辞を送ることができるでしょう。しかし、その成果の陰に生じた暗い面を見過ごすこともできません。教え、育てることには成功したものの、人は生涯学ぶ生き物であると知りながら、そのまなびを支えることに無関心だっ

たことは、今反省すべきもっとも大切な点でしょう。ひとはくは、いち早くそのことに気付き、自然・環境にかかわる生涯学習の支援のあり方をさまざまな角度から検証してきました。共生のひろばにいたる道もそのひとつです。そして、これらの成功に基づいて、21世紀の日本の博物館の為すべきことを社会に向けて発信しようとしています。ひとはくの活動に眼を向け、この活動に世界中の人々が眼を向けてくださることを期待しています。

この報告は06年度のひとはく共生のひろばの成果を紹介するものです。上に述べたような背景を踏まえ、第２回の共生のひろばの成果を学び、これをもとにどのように次のステップを刻むべきか、それぞれの人がそれぞれの立場で考察を重ねていただければと念じます。共生のひろばに関心をもっていただくすべての人のそのような検証の積み重ねが、次回の共生のひろばに活性を与え、自然・環境にかかわる生涯学習の飛躍的な発展に結実することを確信をもって期待いたします。

館長賞受賞者（岸本清明氏）とともに（2007年２月11日　人と自然の博物館）